

情報化社会と 大学図書館



理工学部長 本田 嘉秀

近年、情報化社会あるいは情報化時代ということが盛んにいわれる。それはマスメディアの発達による情報量の増加とコンピューターを中心とする情報処理技術の飛躍的發展によってもたらされたといえるであろう。マスメディアとしては、新聞、雑誌などの印刷メディアとラジオ、テレビなどの電波メディアがあげられるが、近年は特に電波メディアの進出が著しく大きくなり、書物ばなれが懸念されている。この傾向は教育、研究の分野、とりわけ教育の分野では新しい視聴覚教育として注目されており、各種の教育用ビデオが活用されるようになってきた。確かに従来の黒板あるいはスライドによる講義にくらべて、ビデオではアニメーションなども取り入れられて、若者の漫画あるいは劇画志向とも一致している。さらに最近の子供達のファミコンゲームへの過熱ぶりはこの傾向に一層の拍車をかけているものと思われる。静かにじっくりと考えるよりも目の前の出来事に敏速に対応していくのである。先日にも、日・米の教育についての相互実態調査結果が発表されたが、初等、中等教育はともかく、高等教育、特に大学教育での日本の評価の低さは、異論なきにしもあらずではあるが、真剣に反省してみる必要がある。これを大学入試を頂点とする入試競争の弊害とするのは容易であるが、その根はもっと深いのではないか。社会風潮として手段と目的が混同されて、本来手段に過ぎないものが、目的と化していることは大変残念なことである。

情報化社会では、必要な情報も不必要な、時には有害と思われる情報でさえも、われわれの身近に溢れてくる。いわば情報の洪水の中にあって、それに溺れることなく、目的の彼岸に到着するためには、必要な、有用な情報を活用する能力が身につけていなければならない。大学は実利のみを追求するところでもなければ、まして生活の知恵を授けるところでもない。大学での勉学の間に自然とそのような能力が培われることが望まれる。そしてそれを達成するものは、自らの学習意欲である。学問とは決して既成の知識の集積ではなく、そこにある真理の探究こそがその真髄である。それはまた、厳しい茨の道でもあるであろう。茨の道の道標とも、また行人の杖ともなるものが知識であり、技術であり、そして情報であると考えることができる。

大学が知的生産の場として、そこに教育、研究の創造的成果を期待するためには、大学図書館の果す役割はまことに大きいものがある。単に知的情報の整理、集積の場であるばかりではなく、学生を含めて広く大学人の学習意欲に応えるものであってほしいと思う。

今日の多様な価値感が溢れる情報化社会にあって、もとより大学は単に知識のデポジットではない。そこには多様で創造的な人材が育成される風土がなければならない。